

第二章 日清談判破裂して（下）

一 雑誌簇生時代

「戦争は創造の父、文化の母」

どこかで聞いたことのある文句だと考える人が多いであろう。戦時中、陸軍の報道部が発行して広く流布させたパンフレットにあったのだ。人間の大量屠殺と、悲惨な庶民階級の犠牲とにおいてかち得た文化に何の価値ぞ！というのは今の世の常識である。

しかしこれまでの世界の歴史は、多くこの言葉の通りで、日没を知らぬ大英帝国の繁栄はナポレオン戦争の結果であり、カイゼル・ドイツの隆興はバリ城下の盟のもたらしめたものであり、アメリカの富強は第一次大戦にぬれ手に粟のつかみ取りにしたものであり、ソ連の急速な膨脹はスターリングラードの悲劇によく踏みこたえた代償だ。

日本ももちろんお多分にもれず、明治以降は世界各国から「好戦国」というレッテルを貼られたほどである。

戦争のたびに資本の大集注がおこなわれて、諸産業を温室栽培的に速成膨脹させる。それに伴うて見のがすことのできないのは、戦争も産業も報道の敏速を必須とする。そこで戦争のたびにジャーナリズムはめざましい発達をして活潑な脈搏をうつ。ワテテルローの戦とロンドン・タイムス、南阿戦争のデュリイ・テレグラフなどが顕著な

例である。

わが明治時代をかえりみると、小規模ながらその例にもれず、その中で西南戦争からその後につづく自由民権運動は、より多く新聞を簇生させて、洗い去られずに戦後まで残った諸新聞紙の基礎を安泰にした。当事者の語りのこした言葉に「西の方から金の雨が降ってくるような気がした」とあるのは、読者が激増して利潤のあがる目ざましさをよく言いつくして遺憾がない。

それに引き換え、日清戦争は雑誌の繁栄時代というべく、それまでは徳富蘇峰の「国民之友」、三宅雪嶺一派の「日本人」、森鷗外の「柵草紙」、坪内逍遙の「早稲田文学」、巖本善治の「女学雑誌」、北村透谷、島崎藤村らの「文学界」など、名ある雑誌は多く、学者や文人が片手間にする啓蒙的な仕事にすぎないかの観があったが、この戦争中、俄然博文館が雑誌王国として擡頭し、その総合雑誌「太陽」は「スエズ以东第一の大雑誌」といわれ、小説を主とした「文芸倶楽部」、学童用の「少年世界」など、またこれまでに比を見ない豊富な内容と、整備した外形とをそなえた。さらに「中学世界」、「女学世界」、「太平洋」などの青年雑誌、実業雑誌が年を追うてそれにつづいた。

金港堂も文芸、少年少女の雑誌を幾種類かだしたことで博文館に拮抗し、春陽堂は又「新小説」において、文芸上の諸傑作を紹介することで、よく「文芸倶楽部」の墨を摩した。

これらの諸雑誌が、戦前の諸雑誌とくらべて面目を一新したのは、中の記事はもちろんのこと、写真絵画の挿入、印刷製本その他の諸体裁、西洋雑誌を模倣し、加味し、参考し、暗示としたこと、言わずして一目瞭然である。

いま名実ともにスエズ以東第一といわれ、その名に背かず明治から大正の第一次大戦ごろまで、日本雑誌の王座を占めて今日も貴重な文献として参考さるる「太陽」の発刊の主旨の一節を引用しよう。（『日清戦争実記』の広告面全三頁を埋めている。明治二十七年十二月の発表）

我が「太陽」ヲ発刊スルノ大主旨ハ実ニ……征清ノ盛挙、我が帝国ヲシテ一躍シテ世界一等国ノ地位ニ登ラシメシノミナラズ、又実ニ第二ノ維新ヲナスノ機ナリ、乃チ我が新聞雑誌モ亦進ンデ世界一等国ノ地点ヲ占メ、第二ノ維新ヲナサンコト蓋シ至当ノ順序ナリ、新聞紙ハ日々社会ニ発スル事実ヲ報道論評シ、一日一時ノ急ヲ競フガタメニ、精密ノ觀察ト豊富ノ趣味ニ欠クル所多ク、又新刊書籍ハ一部一局ニ偏シテ衆人ニ嗜好セラル、ノ区域自カラ限リアリ、乃チ十分ニ社会ノ真相ヲ描シテ周密、深妙、精美、円満、普遍ナルヲ欲セバ之ヲ雑誌ニ求ムルノ外ナシ、是レ欧米諸国ニ於テ、『当代評論』、『イザンバラ評論』、『ハーバース月報』、『北米評論』、『觀察』、『フィガロー』、『反響』、『小天地』、『評論之評論』等ノ諸雑誌ガ多クノ新聞及ヒ書籍ヲ凌駕シテ、偉大ナル勢力ヲ社会ニ有スル所以ナラズヤ」

そして「太陽」が、これら諸雑誌の記事を移植活用していることは、実際に発刊せられたる各号に見れば明かなことで、特に「海外思潮」の欄をもうけ、第一号には独の「ダス・エヒョー」から二篇、米の「ハーバース月報」から二篇、同じく米の「レビュ・オブ・レビューズ」から二篇の論文を訳出し、第二号には英の「コンテムポラリー・レヴュー」と仏の「ルビュ・ド・ルビュ」より各一篇ほか二篇を訳出するという風で、第三号には英の「ナインティーンス・センチュリー」にのった「宮さん、宮さん」の英訳まで紹介している。（但しこれは「早稲

田文学」より転載とことわってある。) 珍しいから一節をのせておこう。

Oh my prince ! O my prince !

What is that fluttering in the wind

Before your imperial horse ?

chorus

To koto nya, retonya, rena

This is the signal for chastising the rebels

Those three Standards of Brocade !

べつに博文館がこれら欧米の諸雑誌を、丸善を通して購読したとは、どこにも記入せられていない。但し丸善購読にちがいないことを間接に立証すべき有力な資料がある。このときから十二、三年ののち、博文館の編集員長谷川天溪がイギリスに特派せられた時の通信が「文章世界」にのったのを見るに、ロンドンの諸雑誌社を歴訪して新たな年ぎめ購読を申しこむと、「うちはこれまでマル屋を通して取ひきをおねがいでいた」とイギリス雑誌の店員みづから語っている。(「丸善外史」を参照)

二 戦争前後の英文学界

「太陽」は記事も精選せられ、今日も再読の価値ある評論や報道が多いが、これが諸外国にたちまち認識せられて反応を呼んだのは、巻末に「英文欄」数頁をのせ、外人の興味をひきそうな題目数項ずつのせたからである。執

筆者は英学界の著宿の神田乃武で、彼が高等商業学校で教えた学生の中から、とくに英文に達者な学生福田徳三をえらんで補佐にもちいた。後年、福田博士はあれが自分の外国語熟達にどれだけ、やくにたったか知れないと述懐している。

その英文記事のなかに「日本における英文学の普及」(Popularity of English Literature in Japan)と云う記事がある。(「太陽」明治二十八年十月)

その主旨をのべると、この数年、日本における外国文学趣味の普及はいちじるしいが、英文学が主で、ますます盛んになる傾向があるに反し、他の外国語への興味は云うに足りない。この二十年ばかりの間に、英語は日本語ばかりか、日本人の考え方、表現方法から、文章のスタイルまでを大きく変えた。小説ことに新聞は、西洋特有の言語、表現、! ?などの記号を頻用し、英語を一字も知らぬ読者もそれを理解するに苦しまない。甚しきにいたっては欧文直訳式のスタイルというのがあり、みな成功しているとは云えないがジョンソン式誇張、カーライル式勇健を殊更にまねたのもある。

この国の英語教育の方法は初期において辞書文典との首つびきで、シェークスピア、ディッケンズ、バイロン、スコットの諸著作と悪戦苦闘するのだから、鑑賞玩味ということからは遠かった。哲学、歴史、科学の諸著も早くから攻究されても、そんな語学力で理解はおぼつかない。それが最近は状態が非常にかわってきた。

「ディッケンズ、サッカレー、エリオット、ヘンリ・ジェームズその他がもてはやされ、さらに黄表紙の小説、探偵小説が一時大流行した。読書力のすすんだ者は『デヴィッド・カッパフィールド』、『ヴァニティ・フェア』、

『アダム・ビード』『アンクル・トムス・ケビン』のような作を翻譯すべきだとすすめている。今日、諸学校では『アイヴァンホウ』『ラセラス』『ヴィカア・オブ・ウェークフィールド』が好んで用いられ、七、八年前に用いられたマコーレイの『ウォレン・ヘスティング』『スペンサーの『代議政体論』、ミルの『自由論』などの難解なものに代ろうとしつつある。」

小説の中にはイギリスの作から換骨脱胎したものが多く、それが固有の日本の作以上の歓迎をうけている。

日本人は雄弁と、ユーモアの趣味は解すること稀薄である。また散文に比して、詩の読者は少く、バイロン、ブラウニング、バーンズ、テニソンなどは、用語のむつかしさから味到の域に至るには遠い。しかしそれでありながら日本の近代詩は西詩の影響をうけることいちじるしいので、英詩の完全に鑑賞せられるようになるのは、日を期して待つべきである。云々。

これは高山樗牛がその前の「太陽」(七月号)の時論において、当今の新聞紙上の翻譯小説は涙香の探偵小説は云うまでもなく、ライダー・ハガードなどで冷や汗がながれる。

「欧洲文学の古代は云わず、独逸とも仏蘭西ともいわず、我が国人に普通よまるる英文学の中にも沙翁ミルトンは云うまじ、同じ小説ならばせめてはディッケンズの David Copperfield か The Old Curiosity Shop か又はサッカレーの Vanity Fair 乃至ホーソンの Scarlet Letter でも訳して貰いた。」

と云うのに相呼応するもの。のちにハイネ、ゲーテ、ヨークイ、グリルバルツェルなど、もっぱら独洪の文学のみ耽読して、英文学については一言もいわなくなった高山樗牛も、日清戦争のころは、翻譯をすすめるので挙ぐるところ、

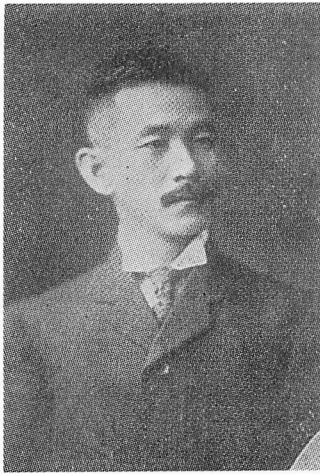
英米小説にかぎられ、また神田乃武の英文記事も、読まるるのは主として英文学で、他国文学は微々として云うに足りないといひ、その意とするところ、符節を合した如くである。これは日露戦争の前夜から、文壇の嗜好が急旋廻して、内田魯庵や森鷗外が大陸文学の英独訳書名を列举し、丸善の店頭もまた英米小説の陳列から、大陸小説の氾濫に代つたのと並べて彼此前後たがいに対比して考えるため、とくに注意しておかねばならぬことなのである。

「太陽」とともに博文館の進水させた新雑誌「少年世界」も、丸善の歴史のなかに記録をとどめておいてよい因縁がある。まことにわが国空前の整った少年雑誌で、明治後半の小・中学生でこれを伴侶とし、この指導をうけなかつた者はあるまい。森田思軒の訳した「十五少年」の如きは二か年にわたって連載され、西洋の海洋冒険譚のいかに面白いかを満喫させ、六、七十代の老人はいまでも思出話にする。

それよりも一そう興味があるのは、この主筆巖谷小波が早くも、少年文学における日本の代表とみとめられ、アメリカの女流作家から日本物語一篇の寄稿の交渉をうけたことである。左に引用する記事をみよ。（「太陽」第一巻五号）

「漣山人（巖谷小波のこと）の名はつとに大洋を隔てたる米国にも聞えけん、さきに米国シカゴ市ホワイトチャペル商会なるアボット夫人の許より、丸善書店において漣山人殿参るの一封、丸善に達しなり。丸屋にては早速右の書を博文館に届けたれば、山人取る手遅しと封押し開き読み下せば、春蚓秋蛇の手跡にて認めたる英文の文意は左の如し。

今日の世ばかり許多の作家の輩出せしこと古にも例少しと存じ申候。就いては今代の記念として世界各国



巖 谷 小 波

代表すべき一卷の物語集出版仕度く、我が米國を始め英、仏、独、露、以、西、瑞典、諾威等の代表者はすでにそれ／＼相定まり候。さるにひとり日本をのみ漏らし候こと如何にも不公平と存じ候につき、貴下に御依頼申上候は、日本を代表して右物語集の一章御引受被下度候。御承諾被成下候はば、今日より六ヶ月間に御脱稿相成候様御運び被下度候（中略）。右物語集はニューヨーク及びロンドンにて出版の計画に有之、尚ほ貴下にて思召も有之候はゞ一部進呈可致候間、日本にて御出版苦しからず候。何は兎もあれ早々の御返事奉待入候かしこ

山人は之に對し猶詳細の処承りたし、然る上にて相當の作家に相談致すべしとの文意にて返事を送れり。右アボット夫人といへるは一箇の女小説家にして、來信に添へたるホワイト・チャベル商会書目中に自著ゼラス・ファザー Jealous Father の名を録したりといふ、漣山人の名譽は無論のことなるが、これも戦勝の余威賀すべきことにこそ。」

興味があるから全文を引用した。太平洋をへだて文学の交流が開けかけた消息が推知できる。これは全く文中にあるとおり戦勝の余威で、そうでなかったら中国がえらばれるところであつたろう。それより注目すべきは、その書状が丸善を通してとどいたことで、すでに日本の名士なら、アドレスは分らなくても、丸善の仲介でとどくとの認識が、海外にも生じていたこ

とがわかる。それに右の太陽記者の文中、丸善の文字を二度に丸屋の文字を一度混用しているところを見ると、このあたりが丸屋の蛹さなぎから丸善が蝶々になってはい出る境界線だったとも見られる。

「少年世界」の、英文読書趣味の拡大に貢献したこと、もちろんこれらにとどまらない。すなわち神田乃武がこの雑誌でも投稿の英文欄を担当し、これに応募した少年たちが十年後の日露戦争あたりから、日本の英語読者の中堅となり、中には名士となった人も少くない。ことに東京深川学校の岡田うらと名のる少女は、年十四で、英文和訳、和文英訳両方に、連月甲位を占めていた。いまの大学生でも、初年級ではあれだけに書けるだろうかと思われるほどの才腕を示したが、どうなったであろうか。

この雑誌の日本作文の投書家からは、後年世に知られた多くの名士、文豪を輩出した。第一巻第一号の作文第一等の当選者には栃木県師範学校生の野間清治がいる。本人は生涯洋書をよんだ形跡はないが、その創立した雑誌王国の講談社は、多くの西洋書物雑誌を消費し、今では日本美術や芸能の洋書を出版してあべこべに海外に輸出している。

明治中期の投書家としては、谷崎潤一郎が出色である。彼は文壇擡頭の青年文士のころオスカーワイルドの「ウィンダーミヤ夫人の扇」を翻譯し、スタンダールの英訳なども耽読した。この筆者もガーンシイの島で刊行せられたバルザックの英訳の限定版を彼に贈ったことがあった。これは丸善に只一冊だけきたのを内田魯庵に教えられて買った珍書で、いまもどこかに保存されているなら、明かに丸善のラベルをみることできよう。（「丸善外史」参照）すこし遅れて、芥川龍之介は考え物の投書家であったそうだ。彼は丸善史においても、今なお思出話にのこる

ほどのおびただしい洋書消費者であつた。

丸善の二階

しぐれふる町を幽^{かそ}けみここにして 海^{かみ}彼の本をめでにけるかも
という歌さえある。

明治四十年代にはいると、平林初之輔やこの筆者が投書家として登場した。大正の半ば、第四階級の文学として、世にプロレタリア文学呼びかけの最初の一声をあげたのは平林である。早稲田の英文科の出だが、フランス文学の教授になったほどフランス文学に造詣ふかく、ことに科学が好きでポアンカレの物を耽読し、岩波書店からその翻譯まで出しているが、これは専門外なのに石原純博士が推称しておかなかったほどの出来ばえを示したものである。彼の書き入れのいっぱいあるブランデスの「十九世紀文学主潮」の英訳のなかの「フランスのロマンチック派」の一冊は、形見として今も筆者の手にあるが、明かに丸善のラベルが貼つてある。この筆者の如きは、文壇においても、学界においても一雑兵たるに過ぎぬので、ここに以上の大家と名をつらねるのは、まことに雑魚のとまじりにも当らぬほどで、むしろ滑稽だろうが、さきに「丸善外史」を著わし、今またこの「丸善百年史」の執筆にあつて、因縁浅からざるものがあるから、あえてこの「少年世界」の投書家あがりである前身を明かした。この少年雑誌が丸善史に数頁を占めてよい理由は、以上に於て明かであらう。

三 學術と社会問題書籍

ここではばらく文芸詩歌の記述をはなれ、戦勝終了後の學術書的一端を瞥見することにしよう。

それには東京専門學校（今日の早稲田大學）から明治二十八年の十月をもつて公表され、翌二十九年から發行に着手された「早稲田叢書」を例にとることが、暗示的であると考える。なぜならば東京専門學校は、東京大學その他が主として外國語の講義をして得々たる時、學問の獨立をとえ、諸學科の日本語での講義に先鞭をつけて、學問の普及の容易化に成功し、その勢にのつて、ユニヴァーシティ・エクステンション（拡張大學）として、逸早く講義録を發行して、多くの校外生を周圍にひきつけた。その補助読本のようにして企画したのが「早稲田叢書」でそれは左の諸篇からなる。

- | | | | | |
|----|----|---------------|--------------|-----------------------------------|
| 第一 | 英國 | 政治汎論一名沿革實用政治學 | ウッドロオ・ウイルソン著 | 日本文學士高田早苗訳 |
| 第二 | 英國 | 經濟原論 | マーシャル著 | 日本法學士井上辰九郎訳 |
| 第三 | 英國 | 英國國會史 | スコットオ著 | 日本文學士高田早苗訳 |
| 第四 | 英國 | 英國外交政略 | 井レイス・サージェント著 | 日本文學士高田早苗訳 |
| 第五 | 英國 | 經濟學研究法 | キエーン著 | 日本文學士天野為之訳 |
| 第六 | 英國 | 經濟政策 | シジウ井ツク著 | 日本文學士金子四郎訳 |
| 第七 | 獨逸 | 獨逸民法論 | デルンブルヒ著 | 日本法學士中村進午
法學士高根義人
法學士副島義一合訳 |

- 第八 米国 政治学と比較憲法 バルゲス著 日本文学士高田早苗 市島謙吉合訳
- 第九 英国 英国憲法論 ダイシー著 日本文学士高田早苗訳
- 第十 米国 公債論 エチ・シー・アダムス著 日本文学士天野為之訳
- 第十一 英国 財政論 バステール著 日本法学士井上辰九郎訳
- 第十二 独国 普国国家法論 シュルツェー著 日本文学士副島義一訳
- 第十三 英国 外国貿易論 バステール著 日本文学士土子金四郎 法学士田島錦治合訳
- 第十四 英国 英国今代史 ジャスチン・マッカアター著 日本文学士高田早苗訳
- 第十五 英国 信用組合新論 ウォルフ著 日本文学士池部駒男訳
- 第十六 英国 英国国民史 グューン著 日本文学士高田早苗訳
- 第十七 英国 欧州民政史 アースキン・メー著 日本文学士高田早苗訳
- 第十八 独国 独逸商法論 ウイルヘルム・エンデマン著 日本法学士志田鉦太郎訳
- 第十九 近世外交史 文学士有賀長雄著
- 第二十 国法 文学士有賀長雄著

東京専門学校は、薩長連合のクーデターにあって下野した大隈重信が百折不撓の信念をもって設立した学園で、はじめは西郷の私学校の二の舞といわれ、乱臣賊子の養成所として政府の圧迫虐待にたがう中に成長したから、叛骨と野党精神とを土性骨としたが、しかし学祖の三尊の高田早苗、天野為之、坪内逍遙とともに官学東京大学の

出身なので、迎える講師は多く東大出だったのは一奇で、あだかも粗硬な素焼きの椀に美肴を盛った観を呈した。けれどこの頃まだ自校の卒業生には、母校で教鞭を執るに堪える者が出ていなかったのであらう。

この叢書中、日本人の著は二十巻中の一割で、他はみな翻訳であるのが、いまだ若き日本の学界の象徴である。あだかも日本最高の文豪森鷗外の著作の過半が翻訳なのと似ている。そしてこの訳者はみんな学士で、ただひとりこの称号をもたぬ市島謙吉も、東大の中退なのである。してみれば、これらの原著は、東大で読まれ、また講ぜられたものが、象牙の塔から街道に出たので、つまり官民一致の学問的趣向をこれで卜し得るが、いま早稲田大学図書館所蔵のこれらの原著をみると、たいてい丸善のラベルが貼ってあるから、それが台本につかわれたのではないとしても、その店頭で購いえたことは確実である。

このような探索を百科万般におよぼす余裕はないが、ついでを以て「社会問題」をのぞいてみると、次の諸著があがっている。（大原社会問題研究所の「日本社会主義文献」による）

明治二十七年

新旧社会主義（前後編） グラハム著 森山信規訳 博文館

理想的国家 トマス・モア著 荻原民吉訳 博文館

明治二十八年

社会革命論 ？

明治二十九年

この中で注目すべきは Socialism: New and Old, by William Graham だ、これより前明治二十六年、この書を主軸とし、ジョンレイの「現時の社会主義」をいささかつきまぜて「現時之社会主義」(平民叢書第六卷)として民友社から刊行され、幸徳秋水、堺枯川の両先覚が社会主義を知りそめたのはこの書によるとして、重要視せられ、後から出た森山信規の訳書もののちの社会主義志向者に影響をあたえること大きかった。民友社および森山のもちいた原本が丸善購求かどうかは、これ又知るすべがないが、このグレーヤムの書は筆者も一本を所持し、これには明白にラベルが貼ってあるので、こういう書もすでに丸善店頭にならんでいたのだ。丸善発行の「和洋書籍及文房具時価月報」の明治二十六年十二月二十五日第一二三号に丁度記載されている。さらに好学の士、もしくは好奇心の強い人は哲学雑誌、科学雑誌、医学雑誌、数学雑誌などの図書について、ひもといてみれば、そこに言及されている洋書の名によって、ほぼ丸善店頭に並んだ書目の推測がつくであろう。

四 立て直しの新陣形

戦時も、丸善の表看板の洋書輸入が最高の売上げを示したのは、前にかかげた表の示すとおりだが、しかしハデに利潤をあげたこと、北鮮から清国へ外征した軍隊の急需する防寒具その他の唐物に及ばず、書物は定価がきまっているのに反し、これらは原価の二倍三倍ではけてゆき、そのため連続しては祝宴を開いていることはじめに「丸善社史」から引用した通りである。いま第一等史料として社員中村重久(のち社長)が書きのこして、わずかに焼



中村重久（四代社長）

失をまぬかれている日記を引用し、当時の状況をしのぼう。

「十月（明治二十八年）十四日 去ル十一日マデニ店販売高
一万円以上ニ達シタルヲ以テ、本夕、右祝宴ヲ開キタリ」

十月廿二日 本日深川大崎綱嶋共同ニテ金生楼ニセリ市ヲ開
キタル処可ナリノ景氣ニテ各店販売メ高ハ九千五百円余アリ

ト

十月廿七日 去廿五日迄店販売高二万円已上ニ及ヒタルヲ以
テ今夕亦祝宴ヲ開キタリ販売高ノ斯ク多額ニ及ヒタルハ唐物店開業已来初メテナリト云フ。

十一月廿日 販売高本月モ去十六日迄ニ於テ一万円以上ニ達シタルヲ以テ、本夕又祝宴ヲ開キタリ」

戦争は五月に平和条約が締結しても、韓国には軍隊が駐屯し、官吏壯士商人その他日本人の滞在する者が多く、丸善は京城詰所において内田酒一郎が赴任し、金沢末吉が再度出向いているほか、他の店員も連絡のため日韓の間を往来している。これが丸善の最初の海外機関であろう。

明治二十九年を迎えたのに対し、三宅雪嶺の「同時代史」にいうところは、すこぶる味わいが深い。

「昨年の戦勝に酔いしと違い、すこぶる複雑なる観を呈し、賀するが如く、歎ずるが如く、希望に燃ゆるが如く、失望に沈むが如し。清国に勝ち、償金および台湾島を得たるは、前例なき成功に属し、国運の発展を示すの明白にして、遼東還付および韓京事変（閔妃の殺害）は、オソロシヤとせし露西亜の圧迫に出で、悲痛なる

憂慮の避くべくもなく、一喜一憂、さらに大なる難関に向うを思はざるを能はず」

国家の全体的表情は晴曇なかばする複雑なものながら、丸善商社一家はしからず、半点の雲影をとどめぬ日本晴の好景氣であつた。

しばらくころみに丸善百年の歴史を通觀して、明治十七年の丸家銀行の破綻から、それが尾を曳く影響と世の不況などがからみ、約十年間苦闘した時期を、社の暗黒時代と呼んでいいとすると、日清戦争の勃發で俄然、新局面が展開し、春風春水一時にきたる好景氣に、漸く陣形の立て直しをして、丸善の性格がほばきまって來た十年間は、社のルネッサンスと称するも不可なからう。

だしぬけに、ぼた餅で頬べたをたたかれたような戦争のうみ出した好景氣に、しかしながら丸善は浮かれてばかりいるわけにゆかず、幹部は、勝つて兜の緒をしめよの自肅が、この際とくに必要であることを認めた。というのは十年前から火の車の経営で、東里為替店の金原明善に援助と整理をたのんでいたこと、既述の通りだったので、株主總會をひらいて、なにかこの場合に処するに適當な対策を立てて然るべしと考えたのである。

そこで戦勝後の第一年の明治二十九年、二月二十七日にそのための總會を招集した。

丸善が明治十七年以来、資産の不足高を時々に消却してきたが、きれいさっぱりになるには程遠いので、消却の終るまで、株金の利益配当を停止するという思いきった処置をとることにした。社内を中心の同族株にひとしいので、この英断にも異論が出なかったが、一般に公募した株だったら、反対者があらわれ、きつと紛糾したであらう。この緊縮の結果はただちに現われ、元來、丸善資本不足高は株金も計入して四万五千二百円あつたのが、二十九

年の年末には二万三千余円にへり、翌三十年末には一万二千八百円に縮少していつている。

この勢に乗じ、社内の雑務にも、内規を制定する方がよいという考えがおこり、鈴木仁一郎が草案をつくって、社内のおも立った人々、松下鉄三郎、小柳津要人、金沢井吉、三次半之助、山崎信興、竹本廉治などと協議してこれをきめた。「丸善社史」に「内容がいかなるものか現今その資料が存しないので知るを得ない」とある。しかし中村重久日記に

「四月廿九日 丸善内規ヲ制定シ本日コレヲ議定シ了ル来ル五月一日ヨリ漸次施行ノ筈

四月卅日 内規ノ大意ヲ部下社員ニ通ス

五月三日 内規ニヨリ各部ニ於テ社員預及雜費ニ属スル伝票ノ發送ヲ本日ヨリ停止ス

五月四日 内規ニヨリ各部ニ於テ宿直ヲ定メ本日ヨリ施行スコトニナレリ宿直員都合十四名二名ツゝ順次交代スル筈ニテ自分ト原田正幹ハ以後毎曜^(ヤマ)日宿直員ニ当レリ

五月六日 中央部ヨリ計算メ切時間已後ハ四時トシ四時後ハ翌日ノ計算ニスヘシト通知セリ又本日中央ヨリ職員辞令ヲ下付シ専任者ヨリ已下ノ分ハ書店ニテハ金沢唐物店ニテハ小生代テ受領シ給料支給規定ヲ添ヘ各職員ヘ下付セリ

唐物店職員人名等級ハ左ノ如シ

竹本ハ三等上級職員ニテ唐物店仕入販売専任山崎ハ同輪出入部専任ニテ別ニ手当金五円河村ハ四等下級職員ニテ小売部専任多門ハ六等下級職員ニテ工作部専任渡辺ハ六等下級伴ハ七等上級三浦ハ八等下級松井ハ九等上級

樋口平野ハ九等下級ニテ何レモ手代申付ラレタリ

五月八日 宿直員服務規律成ル

五月廿五日 中央ヨリ本日限各部ニ於テ雑益金利給料ノ伝票発送ヲ停止スルコトヲ通知セリ

七月十七日 本日午後七時半ヨリ工作部樓上ニ於テ丸善茶話会第二回ヲ開ク棚卸日ノ事内規ノ事、電話ニ関スル事項ヲ議定シ同十一時散会シタリ」

これらの記事によって、その内規は大体の想像がつく。とくに「電話ニ関スル事項ヲ議定シ」とあるのに注目すべきで、東京に電話の初めて開通したのは明治二十三年で、通話開始の十月二十二日までに申しこんだものは、わずか一三四名であった。逋信省電話局が「東京横浜電話交換加入者人名表」として新聞に宣伝広告しているのを見ると、中に丸善商社も二八番として入っている。しかしそのころでも何百万都市の東京に、わずか百台あまりの開通電話では、商売にも物の用にもならなかったが、年々加入者がふえ、ことに日清戦争とともに飛躍的に増大して、この文明の新利器に、なにかの規定が必要になってきたことは、よくうなずける。

「七月廿五日 本日棚卸ヲ施行シタリ商品有高一九一四四余ニシテ昨年ニ比スレバ一一四四四余ノ増加ナリキ」

年を越えて、明治三十年二月十七日の中村日記をみると、次のような記事がある。

二月十七日 本日中央へ廿九年商況ヲ上申ス其商況左ノ如シ

廿九年中販売高ハ十三万三千四百七十円ニシテ好況ナリシ前年ニ比スルモ尚三万二千二百円余即三割強増加ナル

ヲ以テ先好況ナリシト云フノ外ナケレトモ販売高ノ増加ハ總テ好況ノ結果ニアラス商品原価騰貴シタル為ニモアリ且本年ハ震災アリ水害アリ天災荐リニ至リ一時ハ運輸ノ便ヲサヘ杜絶シ次テ恐慌談アリ時々商勢ヲ挫折セラレ又商品ハ輸入常ニ少カラス和製品亦近年ハ大ニ増加シテ時々過多ノ觀ヲ呈シ從テ競争濫売ヲ試ミルモノアリシヨリ其影響ヲ蒙リ予期ノ利益ヲ上グル能ハサリシヲ以テ充分ナリシトハ云フヘカラス